

浪

子

出されたお前さんだから、もう何も関係にはならない、強つて手切  
 金が欲しけりやア、杉本さんと相談をして勝手にしなさい」と云は  
 れて松代も仕方がない、松代何だねエ、六太夫さん、自分の意気地な  
 しから失敗したことを言はないで、手切金が欲けりやア杉本さんと  
 相談をして勝手にせよとは、ホ、ホ、可笑しいわ、お前さんは私  
 宿無だから、こんな女を家に置くのは嫌だと云ふ謎でせう、ハイ宜  
 うございませぬ、無理にお前さんのお世話にならなけりやア、この身  
 が立ち行かないと云ふのでもなし、廣い世間ですもの、また花を咲  
 かせる春もありませぬ、そんなら杉本さん、妾アお前さんと能く相  
 談をしたらいからねエ、兎も角も貴方のお宅へ行きませう、この意気  
 地なし奴が……」と松代は大きに腹を立てまして、六太夫に向つて  
 悪口を吐きました、六太夫も閉捨には出来ませぬ、六太夫な、何だ  
 と、俺に向つて意気地なしだと、何が意気地なしだ、俺は悪い事を  
 したから、ア、悪かつたと改心をしたまでのことだ、餘計な事を吐

浪

子

しやアがるな、貴様との交際もこれ限り、トットと出て行きやアが  
 れッ松代、ホ、ホ、大した権幕だねエ、こんな家に暫くも居るものか  
 今から出て行くヨ」とこれから松代は自分の荷を俵に乗せ、杉本五  
 兵衛と一緒に杉本の宅へ参りました、かくて男女は種々と相談の上  
 彼の清左衛門の居る間は幾ら言つても駄目だ、そのうちに清左衛門  
 が上海へ歸るであらう、そのときには男女で強談に行かうと云ふこ  
 とになりましたが、松代もこの年をして、再び以前の勤も出来ない  
 ものですから、杉本は自分の金を出し、浅草の但ある所へ松の家と  
 云ふ待合茶屋を開かせ、おのれは松代の男妾同様に居りまし  
 た、然るに此方の玉川清左衛門は、可愛い浪子が病氣のため、ツヒ  
 歸る氣にもならず、一日遅れに遅れまして、また玉川家に足を留め  
 て居ります、松代はこれを聞き、ある日杉本に向ひまして、松代ねエ  
 の病氣も餘程悪いさうだ、寧ろそのことにあの清左衛門を殺してしま

ひ、その後へ妾が行つて、彌左衛門を口車に乗せて救し込んだら何うだらうねエ、然うすりやアまたあの財産は何うでもなるヨ、竹蔵はあの一件から自暴になつて、柳橋へ入り浸りになつて居るさうだから、彼れはあれで打棄つて置いて、是れから二人で始計まうぢやアないか、杉本、道理だ、それぢやア一ツ乃公が昔の度胸を顯はして、一番清左衛門を殺つて見やう」と男女の間に相談が出来上りました、之れに依つて杉本は玉川家へ忍び込み、首尾よく清左衛門を斬り付けました、彼の權助の爲に邪魔をせられ、望を果さずして、玉川家を逃げ出し、一目散に走つて居りますと、今までは無我夢中で走つたから、痛いも痒いも覺えませなんだが、段々人里離れし野路をやつて來ると、右の足がシクシクと痛み出しました、後方を振り返つて見ると、自分の月影より外には何もございせんから、杉本「ア此所まで逃げて來れば安心だ、併し滅法界に足が痛み出し

はねへ丈夫な齒だなア」と云ひながら自分の足を月に透して見ますると、權助が一生懸命力に任せて噛んだものですから、骨まで徹つたかと思はれるやうな大きな齒形が附いて、其所から流れ出た血沙がつた」と云ひながら懐中の手拭を出さうとしたが、途中で落したものが、その手拭がありません仕方がないから、自分の着て居りました襦袢の袖を裂き、これを以て足に綁帯を致しました、杉本「ア是れで宜いわい、オガこれから汽車に乗れば屹度警察の手が廻つてゐるに相違ない、これは何うでもこの街道を歩いて歸ることには仕やると徐々と歩き掛けました、大變にその傷口が痛い、無理に辛抱して歩かうとすると、その痛さが頭の先まで徹へまして何うしても辛抱が出来ません、もう仕方がない、その片邊なる一軒の百姓家を叩き起しまして、杉本「誠にお氣の毒ですが、私は只今友達と喧嘩をしてやうく此所まで逃げて來たのでナ、夜の明けけるまで此家で休まし

浪

子

て戴く譯には参りませんか、朝になつたら直ぐに東京の方へ行くの  
 でございませうと云つて頼みました、するとその家の爺が、  
 は何うもお困りでせう、サア上へ昇つてお休みなさいまし」と云つ  
 て呉れるものですから、杉本も大きに悦び、暫く此家に休んで居り  
 ました、左右するうちに夜も明け放れましたので、杉本はこの家を  
 立ち出でやうとする、何うも右の足が痛くつて歩けない、そこで  
 この家の爺に頼みまして、醫者を呼んで来て貰ひ、その手當を致し  
 ました、然るに昨夜の玉川家の騒動が忽ちこの邊にまで開いて來た  
 ものですから、それと聞いたこの家の爺は驚きまして、  
 ア彼の人は玉川の旦那を斬り付けた奴かも知れない、早う駐在所へ  
 言つて行け」と云ふので直ぐにその趣を駐在所へ届けました、之れ  
 に依つて駐在所の巡査は、それと云ふので飛ぶがごとくにこの家  
 へ駆け來り、有無を言はさず、足の痛さに堪擲して居る杉本五兵衛  
 を召捕り、難なく繩を掛けてしまひました、これと同じ時刻のこと

浪

子

でありませう、東京なる淺草の松の家と云ふ待合茶屋へ刑事巡査が二  
 人這入つて参りました、松代は長火鉢の前に座り、袴に首を埋め、  
 昨夜の首尾は如何にと案じて居りましたが、いま二人の刑事巡査を  
 見るとサツと顔色が變りました、二人は顔見合せて何か打首肯さま  
 した、一人の刑事がツカ、と松代の傍へ上つて参りまして、  
 貴様は當家の女主人松代と申す者であらう、松代「ハイ、妾が松代でござ  
 います、刑事一寸と取調べある義がある、我々と同道して警察まで出頭  
 せよ、松代「オヤ何か御用があるの、でございませうか、刑事「取調べる事があ  
 ると言つてるぢやアないか、松代「妾は何も警察へ出まして、取調べら  
 れるやうな事を致した覚えがございませう、刑事「ナニ警察へ出る覚え  
 がないと、コリヤ貴様は杉本五兵衛なる者と共謀をして、玉川清左  
 衛門を殺さうと爲たであらう、松代「エーッ、刑事「何もさう驚かなくつて  
 も宜い、杉本五兵衛は昨夜玉川清左衛門を斬り付けたが、今朝忽ち  
 捕縛になり、自分の口から松代と共謀をして、殺人を行つたと白状

浪

子

してしまつたのだ、サア尋常に繩に掛れい」と云ふと庭に佇つて居り、無理から繩を掛けやうとする、飽くまで大膽なる松代は尙ほも抵抗ひまして、松代貴方は何をなさるのです、假令杉本が共謀と申しましたも、妾アそんな事は夢にも知りません、警察などへ行く覚えはないのですヨ、刑事喧しい、言ふ事がありやア警察で言ふが宜い、我々には貴様を逮捕に来たのだ、松代嫌ですヨ、妾アそんな事をした覚えがないので……、刑事コリヤ素直にしないか、逮捕するのには我々の役目だ、君、それッ……」と云つて目成をする、一人の刑事が抵抗ふ松代の衿首を引掴み、その場へ指して振り伏せるなり、有無を言はず、後手に縛つてしまひました。

第十一回

今日しも小春日和のことゝて、空はうらゝかに晴れ渡り、吹く風は

浪

子

何所からともなく得ならぬ菊の香を誘つて来る、浪子の病氣も少しく快くなつたやうな色が見えるので、今日は珍らしく椽側に褥を敷かせまして、お玉一人を傍に置き、浪子は脇息に凭れて庭の景色を見たり、泉水の邊には秋萩が咲き亂れ、雪見燈籠の横手の紅葉は茜色をいたして居る、池の中の緋鯉がとき／＼浮み出て、水の中に散つた紅葉をば歎と間違へて啄いて居ります、浪子はその光景をつくと眺めて居りましたが、お玉や、妾も長らくこの庭を見なかつたが、もう全然秋景色になつたねエ」と云はれてお玉も、浪子の顔が少しく血色の好くなりしを喜びまして、お玉本當に然うでございませう、お嬢様が床にお就きあそばしてから、もう二月ほどにないのでございませう、あの頃は夏の暑い時分でございましたが、此頃は除程凌ぎよくなりましたねエ、お嬢様も最うこの御様子ならお床上也直ぐでございませう、それに村井様の御卒業も目の前に見えて居るし、本當に妾は嬉しく思つて居るのでございませう、浪子、妾も



浪

子

ますから、若しも眞正の事を申し上げまして、お身體に障るやうなことがあつては一大事と、ツヒ〜、偽はりを申し上げましたのは、誠に相濟まないこととございます、そのやうな事があらうとも、御心配をお話し致しまするゆゑ、何のやうな事があらうとも、御心配をお話しては可けませんヨ、實は先達てお嬢様がお目をお隠しなされた晩のことでございます、何者とも知れぬ曲者が忍び込み、上海の且那様を斬り付けたのでござりまする」と聞いた浪子は吃驚仰天、  
 浪子「エーッ……」と餘りの事に弱き身の、あはやその場に打ッ倒れんと致しましたが、傍の脇息にてその身を支へながら、子玉、してお氣の毒なことでございまして、何しろ寢てお在であそばした所を曲者が斬り付けたので、右の肩先を五寸ばかりお斬られ遊ばしました、それゆゑ只今は、東京の大學病院へ入院つて居らつしやいます、浪子、それ、それから曲者の方は……お玉「ハイ、曲者は翌朝直ぐに

浪

子

引捕へられました、マアお嬢様、何と驚くぢやアございませんか、その曲者はあの杉本五兵衛でございまして、前の奥様の松代さんと共謀をして、且那様を殺し掛けたのでございます、浪子「エーッ、そんなら前のお母様と杉本とが相談して、アノ伯父様を……」と云つた浪子は身體をブル〜と顫はせたかと思ふと、そのまゝ後方へ撞と倒れました、お玉は膽を潰しながら、突然浪子の傍へ駆け寄つて、お玉、それ、それ御覧あそばせ、だから妾が今まで差控へて居たのでございませぬ、お瀧さん、早く来て下さい、水を、水を……と云ふ聲に驚いてお瀧は飛んで来る、お玉「オヤマアお玉さん、それは何うしたことだヨ、ナニお嬢様が氣絶をあそばしたと、これは大變だ」とお瀧は直様浪子の口に水を含ませ、お玉と共に浪子を寢臺の上に乗せまして、醫者が斯う云ふときの準備にと、豫て渡されてあつた回生藥、これを服ませて居ります折柄、この變に驚いて駆け参りました彌左衛門、彌左「ソレ早く醫者を呼んで来い」と云ふので下女の

お梅は外へ飛び出しました。間もなく近邊の山崎醫師を迎へて参りました。併し醫師の来た時分には、最早浪子も氣は注いで居りました。血の氣を失ふて居る、眼を閉ぢて黙つて居るその体は尋常でない、醫師は一通りの診察を仕了り、眉を擡めまして「山崎御主人、お嬢様の御容態は大變に異りましたヨ、彌左エツ、ど、何う變りましたの……。」と彌左衛門は氣が氣でない、顔色まで變へて居る、山崎醫師は聲を低めまして「山崎私考では、激しく神経を刺戟されたやうに思はれます、早速電報で東京の北山博士をお迎へ下さるやう、私一人の診断では何うも覺束ないやうに思ひます、萬一の事があつては濟みませんから」と云ふものですから、直様彌左衛門は東京へ電報を掛けるせました、浪子はとき／＼眼を開けて何か凝視して居る様子でございませうが、また暫く経つと眼を閉いでしまひ、彌左衛門が聲を掛けても無言で居ります、お玉は何うしやうかと、たゞウロウロ

たすばかり、斯くて一時間半ばかり経ちますと「お見舞ツ」と云ふ聲が玄関先で聞えましたと同時に、はや北山博士は下女の案内に従つて、浪子の部屋へ参り、靜かに其所へ腰を下しまして「北山何か異状が出来ましたかナ」と云ふと山崎醫師が「山崎ハイ、昨日から見ますると、大變な異状を來して居りますので、いま一寸とお話を聞きますと、お玉さんが清左衛門君の事を言つたさうです、それまでは顔色も良く、自分も庭が見たいと、様側まで立ち出で、種々な話をして居るれたらしいです、それが急に氣絶をされたさうで……。」北山「然うですか、マア兎も角も診て見ませう……。」ハ、ア、成程、フム……。」と云つて博士は診て居ります、彌左衛門は手に汗を握り心配さうな顔をして、博士の診察を見て居ります、應て診つた北山博士は彌左衛門に向ひ、如何にも氣の毒げに「北山玉川さん、もうお覺悟をなささい、會はせる人でもあれば、これから直ぐに呼び寄せてお上げなさい」と聞いた彌左衛門は聲震はせまして「彌左先生、そ

れでは浪子が危篤しいのでございますか、北山「然うです、お氣の毒だが仕方がありません、令嬢は神経性心臓病でした、その弱つて居る神経に激烈な刺激を與へたものですが、心臓が麻痺を起したのです、併しまだ十時間くらゐは持つてせう、枕頭で大きな聲を出して物を言つては可けませんヨ、この薬を置いて行きますから、苦しさをうな御様子が見えたらお上げなさい、私は他にまだ急患がありま

すから一旦東京へ引返し、また午後七時頃に再び此方へ來ることになり、爲ませう」と北山博士は手當端を言ひ含め、東京指して引返し、

する、山崎醫師も一旦自宅へ引取りました、彌左衛門はたゞ一縷の頼みと思ふた醫師其者から、浪子はいま死の神の手に捕へられつゝ

あると云ふ宣告を受けたので、もう落膽してしまひ、自分手を握れ

足を切れ、其上深い幾十丈とも知ぬ谷底へ落されたやうな氣が致し

たゞ茫然として居ります、お玉は身も世もあらぬ思をいたし、た

泣きより外はない、話頭一轉此所は東京なる大學病院の一室、入口

の黒塗の札には特等玉川清左衛門としてある、今しも白衣の看護婦

が出て参りました、玉川さん、電報でございます」と一通の電報

を差出しました、すると寢臺に死ながら新聞を見て居りました清

左衛門は、これを受取つて封を切り、読み了るや否や突然その場に

立ち上り、清左「オイ看護婦さん、俺は一寸と歸つて來る、院長に然う

云つて、早く傳を……ナニ可けないと、構はない、大丈夫だ、擔架

で行けと、そんな事が出來るか、早く院長に言つて來ないか、叱ら

れると、誰が叱るのだ、何故俺を引張るのだ、放せッ、蒼蠅いッ」

と清左衛門は引止むる看護婦を突き放し、廊下の方へ飛び出しまし

た、折しも彼方より來掛る一名の醫師、それと見るより駆け寄つて

清左衛門を抱き止めながら、醫師「オヤ玉川さん、お待ちなさい、何所

へお出でなさるので、清左「イヤ俺は一寸と家へ歸つて來るので、い

ま姪が危篤と云ふ電報が來たのです、院長に然う言つて置いて下さ

い、醫師「イヤ可けません、貴方は御病人です、院長の許可を受けるま



浪

子

ではお待ちなさい 清左「イヤ待たれない、恐ろしくして居ると死んでしまふ、其所を退きなさい、エ、邪魔するなッ」と清左衛門は自分の可愛い浪子が危篤と云ふ電報を見たのだから沈として居られない遺らじと制めます 醫師を突き飛ばし、バタムと玄關の方へ走り出で有り合ふ病院用の草履を足に突ッ懸け、門外を指して駈け出し、愛した、此方は玉川家でございませう、さらでだに淋しき秋の夕暮に、つたごとく、實に静まり返つて居る、東京の大学の病院から歸つて来た清左衛門を初め、彌左衛門、お玉の三人は浪子の枕頭に居並び、その瘦せ衰へた姿を打守つて居ります、浪子は眼を閉いだまふ何も言はない、餘程苦しいと見えまして、その顔には苦悶の色がありありと現はれて居ります、胸にはドキドキと激しい動悸が波立つて居る様子、沈と眼を見開いた浪子が苦しうな息の下より微かな聲に「浪子、お父様、彌左衛門、浪子……」

浪

子

氣を確かに持てヨ 浪子「お玉様、お嬢様、浪子、もう妾は……」  
 會ひ…… 浪子「お玉御道理で……」とお玉は浪子の心中を察し、我知らず涙は溢れ出る お玉お嬢様、さぞお心残りでございませう、だ、だ、旦那様、妾アもうお嬢様が…… 清左衛門も涙を含みまして、浪子が一番可哀さうで、小さい時に母親に死別して苦勞の仕立、け、その上にこんな病氣、金で買はれるものなら、買つて癒しても遣らうが、こればかりはのウ……」このとき横手の襖を静かに開き、下女のお梅が出て参り、お梅「只今静岡から村井芳子様がお出でになりました、彌左衛門早う此方へお伴申せ、お梅「ハイ……」と應へて出て行なり、入り換りに這入つて来たのは村井芳子、皆に目禮を致して座に就きました、浪子は早くもそれと知り、浪子「ア、ア、芳子さん……」  
 ……能來て…… 芳子「オ、お姉様……」と云つた切り後は涙に咽んで居ます 浪子「お、お兄様は……」 芳子「ハイ、只今東京の市ヶ谷へ仲で寄りましたら、残念だが學校が……」 僕は浪子さんが死ねばいつ

浪

子

までも獨身だ、たゞ浪子さんのお寫眞が一生僕の妻だ、然う云つて  
 呉れ、僕は残念だ、心残りがある、たゞ一目會ひたい、浪子さんは  
 村井浪子だつと仰しやいました、その後は涙の爲にお聲が分りま  
 せんでした、たゞ早う行つて……と云ふお聲が耳に這入つたばかり  
 でございませう」と云ふ聲も悲しさが胸に迫つて漸う出たから、浪  
 子は淋しき顔に嬉しげなる笑を漏し、浪子「お玉さん、わ、妻は村井浪  
 ……子……安心して……死にますヨ、お玉さん、さぞお心が残るで  
 ございませう、何うかお心安う……浪子「有難う……妻が亡くなつた  
 ら……何うかお玉さん、妻の代りに……浪子「御安心あそばせ、お父  
 様は屹度妻が……浪子「ア、苦しい、み、み、水を……」と浪子は胸  
 のあたりを手に當と、苦しげに叫びます、お玉は急ぎ水薬を盃に入  
 れ、之れを浪子に飲ませます、浪子はそのまゝ眼を塞ぎました、  
 忽ち身を藻掻いて、浪子「く、く、苦しいッ」と叫びます、浪子「  
 清左衛門とは兩方より浪子を腰で擦る、清左衛門は浪子の耳許に口

浪

子

を寄せまして、清左浪子、氣を確かに持て、後の事は何も心配する  
 な、浪子「ア、ア、お玉さん……玉や……」と浪子は兩人を呼びます、  
 兩人は浪子の側へ参りますと、浪子「み、み、皆さん……もうこれで  
 ……義雄様……一目會ひたい……もう目が……アツアツ……」と  
 云ふ聲は次第々々に細り行き、もう眼が釣り上りました、このとき  
 北山博士がこの室に入り来り、それと見るより早く一同を退けまし  
 て携へ持ちし薬を浪子の口に入れます、すると浪子はまた沈と眼  
 を見開きました、北山博士は、北山皆さん、早くお別れを……」一同  
 の者が浪子の傍へ参りますと、浪子はハラ／＼と涙を溢し、浪子「お  
 父……伯父様……浪子「清左浪子、心を静めて眠れヨ、浪子「た  
 ま……お玉さん……さらば……ア、苦しい……」と云ふ聲諸共に浪子はこ  
 の世の息を引取つてしまひました、これを見たお玉さんとお玉とは、  
 ね、お玉さん……お玉さん……もう一度……お玉さん……と双方より浪  
 子の亡體に取寄り、聲を惜まらず泣き叫びます、清左衛門と彌左衛門

浪

子

とはその場に打ち倒れ、泣音を忍ばせて居る、流石の北山博士も人の生死を取扱ふは自分の務めではありまするが、この場の光景を見るに堪へ難く、顔を背けて涙を流し、浪子の亡骸は消毒の上白き布もて覆はれ、その翌々日野邊非送を營まれることに相成りまする、何れも小金井の家玉川彌左衛門が合議の葬式でございませう、何れも者の数は實に夥しいものでございませう、その葬式の節多くの人目を惹いたのは、棺の今しも玉川家を出でんとする折柄、下女のお玉が眼を泣き腫らし、お玉お嬢様、何うか今一度玉と言つて下さいます、妻は貴嬢がお悼しうてなりました、もう一週間の後には學校を御卒業されてお在であるお嬢様は、折角樂しみに樂しんで、待ち焦れておばして、貴嬢と御婚禮をなさるのでございませう、それに貴嬢は心残りでごさいませう、代られるものならばこの玉が代つて死にま

浪

子

すのに、モシお嬢様、妻は何うしても貴嬢様の事が忘れられませぬ、何うか今一度お顔を見せて下さいませう、と人目も耻ぢす泣き廻りました、今一度お顔を見せて下さいませう、と人目も耻ぢす泣き廻りました、川清左衛門に手を引かれ、涙ながらに供をして参りまするその姿、實に不見目なものでございませう、然るに彼の武骨らしい竹下泰藏、宮本清の兩人が、會葬者の中に交り、四邊構はぬ大聲にて、竹下ねエ宮本君、あんな淑女と云はうか、賢婦と云はうか、當時の墮落した女學生などは真似も出来ぬ、温順い所に何となう活潑らしい點の、ある、古今稀なる浪子さんを何故天は殺すのだらう、本當に世は無常だ、宮本然うさ、實に無常だ、盛者必滅會者定離、月に叢雲花に風、世は儘ならぬ習かな、僕ア憤慨に堪へない、あんな賢良の婦人を殺さなくつても、他に殺すべき奴は幾らもある、現に杉本五兵衛や松代は何うだ、それにあの弟の竹藏と云ふ奴は自分主人深井喜

浪

子

兵衛と云ふ者の金を五千圓拐帯して、それが爲め目下監獄に繋かれ  
て居ると云ふぢやアないか、そんな奴こそドシク死んぢまやア可  
いのだ、ア、花は散りてもまた咲かう、月は曇りてもまた照らうが  
人間は情けないものだなア、もうあの優しい浪子さんの顔は見られ  
ないかねエ、竹下ム、實に氣の毒なことだ、それにつけてもあの濃厚  
の君子たる村井義雄君の失望想ふべしだ、さぞ断腸の念がするたら  
うねエ」と鬼が出ても引組んで振ち伏せ、之れを叩き殺した上焼い  
て喰ふと云ふやうな荒くれ書生が、眼に涙さへ浮べての立話し、こ  
れを聞いた一同も流石に顔見合せて涙を拂ひます、その涙の中に浪  
子の葬式も相済みました、斯くてその秋も暮れ、冬も過ぎ、今日は  
年改まつた一月元旦でございませ、初日の光りも麗かに、軒の日の  
丸は君が代を祝うて居ります、門には飾り立てた門松を並べ、盛装  
した男、女、老人、子供、みな新年の祝詞を毒いで居ります、イヤ  
モウお正月ほど芽出たいものはございませ、田舎と雖もお正月に

浪

子

異りは無い、然るに小金井の里なる玉川家に於きましては、松竹梅  
の門飾る、國旗を懸してはございませ、何となう物淋しげに相  
見えます、今しもこの玉川家の門を潜つた三人連、一人は軍服殿  
めしい年少士官、後の二人は小倉袴に黒木綿の紋附羽織を着て居り  
ます、是れぞ村井義雄と竹下、宮本の三人でございませ、訪う聲  
に出て来たのは、以前浪子の召使でありしお玉でございませ、お玉、オ  
ヤアお揃で、よく來らつしやいました、サア何うぞ此方へ、旦那  
様も奥様もお待ち兼でございませ」と云つて案内をする、斯くて三  
人が奥へ通りますと、其所へ立ち現はれました新郎新婦、これぞ  
玉川清左衛門の次男清之助と村井義雄の妹芳子とでございませ、芳  
子は少し年も若うございませ、水も溜るやうな丸楯に、曙染の縮  
緬の三枚重を着て居るのが、身長の高いのに釣合うて、誠に艶麗な  
姿にございませ、今しも芳子は莞爾と致しまして、芳子能く來らつし  
やいませしたねエ、オヤ御挨拶を忘れて……先づ明けましてお芽出度

浪

子

う、ホ、ホ、とこれから一同の挨拶が済みました、するとお玉が  
 屠蘇の準備をいたし、お正月の饗應に移りますと、相變らず竹下と  
 宮本とは面白い事ばかりを言つて衆を笑はして居る、お玉も其の席  
 に連つて居りました、何彼につけて浪子の事を憶ひ出し、お玉  
 に思へば浪子様が、この村井様をお見染めあそばしたのは矢張り此  
 所である、そのとき御一緒に居らつしやつたのも、この竹下さんや  
 宮本さん、皆さんは斯うして御無事に芽出たいお正月をして居らつ  
 しやるのに、お嬢様だけは草葉の蔭で淋しいお正月をして居らつ  
 ことであらう、ア、想へばお可哀さうなお嬢様、今更言つて返らぬ  
 事ながら、このやうな体を一目見せてお上げ申したい」と涙ろに過  
 ぎし昔を思ひ込んで居ります、それとは知らぬ竹下泰蔵が大きな聲をし  
 て竹下真個に御當家もお氣の毒だねエ、浪子さんが死んで、まだそ  
 の涙が乾かない間に彌左衛門さんが亡くなられるなんて、この玉川  
 家も少時の間に一轉してしまつたねエ、併し玉川清之助さんと云ふ

浪

子

立派な人物が相續をされ、村井少佐の令親が妻君となつて、萬事を  
 處理せらるゝのだから何も心配はないと云ふものさ、併し同情すべ  
 きは村井義雄君かね……オイ村井君、君も淋しいだらうねエ」と云  
 ふと村井は首を振り、村井ナニ些とも淋しかアないヨ、竹下オヤ君は  
 負惜みを言ふのだね、村井ナニ負惜みでも何でもないさ、僕には浪子  
 の寫真と云ふものがあつて、何時でも僕の徒然を慰養して呉れるの  
 だ」と云つた村井の眼には涙の露を宿して居ります、流石の竹下も  
 これを見て眼を屢叩きました、そもこの玉川家に於きましては、浪  
 子の亡くなりましてより間もなく、父の彌左衛門も彼れや是れやの  
 心配が積り、遂に途冥へ旅立を致しました、依つて清左衛門の次男清  
 之助に玉川家を相續させ、村井芳子をその妻に申し受けたのでござ  
 います、清左衛門の傷もその後だんぐと平癒になりましたので、一  
 旦上海へ引返しました、これ又長男の清一郎に家督を譲り、自分  
 は老の身を氣樂に養はんが爲、故郷に立ち歸り、新夫婦が厚き慰養

に染しう鬼を送つて居ります、下女のお玉もこの新夫婦に仕へ、  
 たゞ浪子の墓詣りを唯一の樂しみにして居る、竹下、宮本の兩生  
 も遂に學校を卒業いたし、何々學士の肩書ある立派な紳士となりま  
 した、陸軍士官たる村井義雄とは相變らず水魚の交際をいたして  
 居りました、松代、杉本五兵衛、竹藏の三人は犯せる悪業が身に報  
 い、現世の地獄に苦しみを送ることとなりましたのは又是非もな  
 き仕儀にござります、先づはなが演じ上げました「ほととぎす」  
 即ち浪子のお履歴も之れにて大團圓と相成りました。

浪子終

明治四十二年五月十日印刷  
 明治四十二年五月十五日發行

不許複製  
 (附 浪子 奥)

講演者 山崎 琴書  
 大坂市南區南廣尾町六十四番地  
 發行者 三宅 英吉  
 大坂市南區心齋橋筋一丁目五番地  
 發賣者 名倉 龜楠  
 大坂市南區鹽町三丁目四十一番地  
 印刷者 吉村 源次郎

大坂市島之内八幡筋西横堀北入

發賣所 島之内同盟館

要點點點點點に貸本商各位は是非左記廣告御覽被下度御利益可有之と存候



▲▲是非お讀下さい▼▼▼

本館は小説専門屋に付一切取揃へ多少に拘らず  
 爲寫り機敏迅速充分御便宜に御取扱可申候  
 特一本館發賣小説は落丁破損等一切無之概取開べ  
 色有之候間(同盟館落丁改印に御注意被下度候  
 御注文の節は總て前金御送附被下度御送金方法は  
 郵便爲替か銀行爲替なれば若金次第出荷可仕候  
 振替貯金は大阪七七一番嶋之内同盟館三宅英吉宛  
 御振込被下度無料到着且至極安全に御座候  
 金領書圖以内には必登記料貳錢御加へ被下度候  
 委細は郵便局にて問合あれ用紙も無料交付相成候  
 書圖以内の御注文には郵券代用不苦候へ共一割増  
 に願上候 但し貳錢參錢の小郵券にて數澤山御送  
 被下候より五拾錢廿錢拾錢五錢等可成高額のもの

にて枚数を少くして御送被下度候

尙郵券御送附の節は相互の粘着せざる様裏面に  
 紙を當て置被下度候往々密着致し剝取に困難と  
 破損變色等の爲無効に相成候間御注意願上候  
 金五圓以内の御注文には代金領收書及荷物發送  
 御案内状等略仕候間現品到着を以て御承認願上候  
 御注文の書名御住所御姓名等は可成明瞭に御認め  
 被下度往々文字の間違にて不都合お生じ候間精々  
 御注意被下度候

御住所御記載の節御地受持郵便局名御記入置き  
 被下候は郵便物取扱上至極便宜に御座候

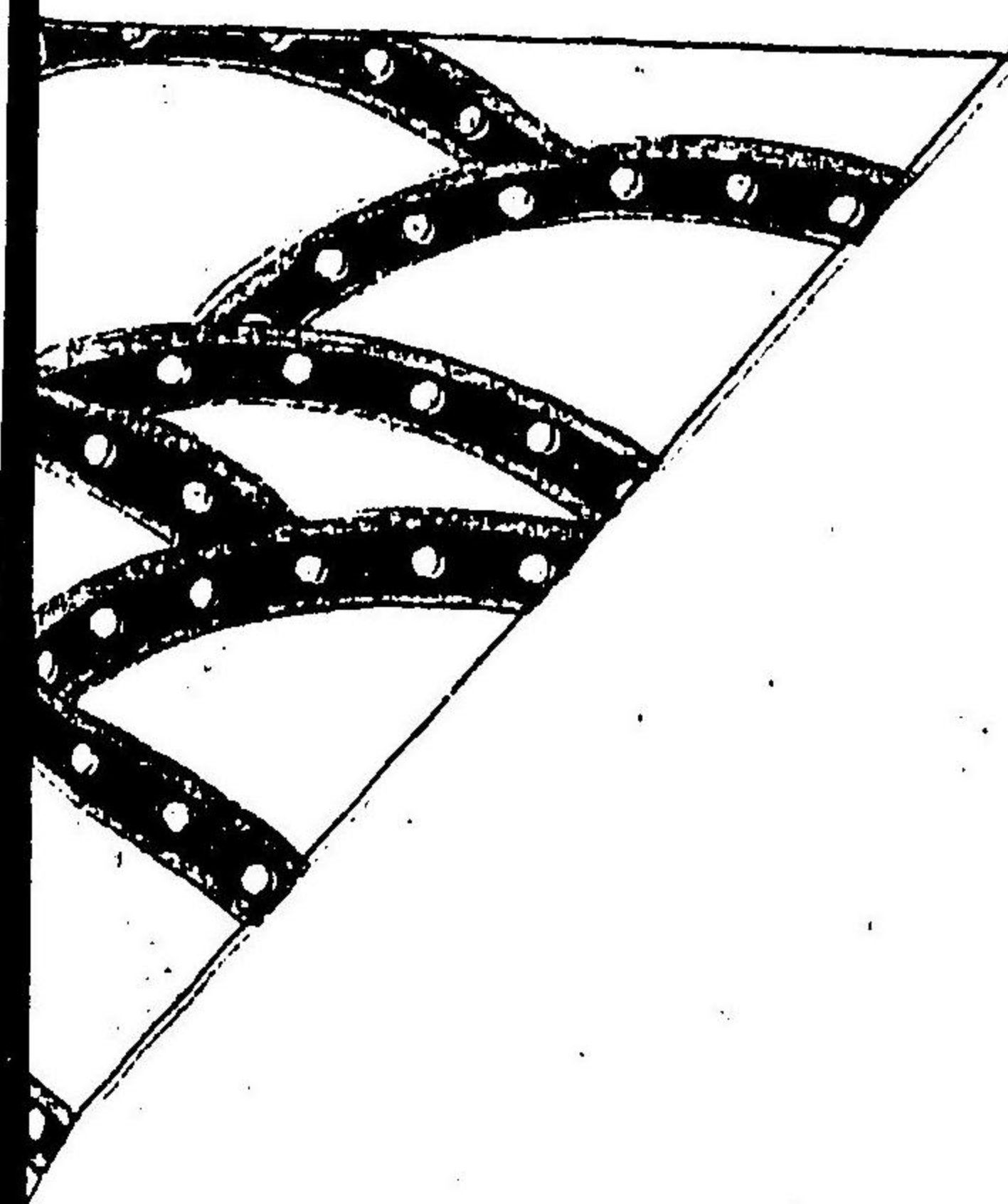
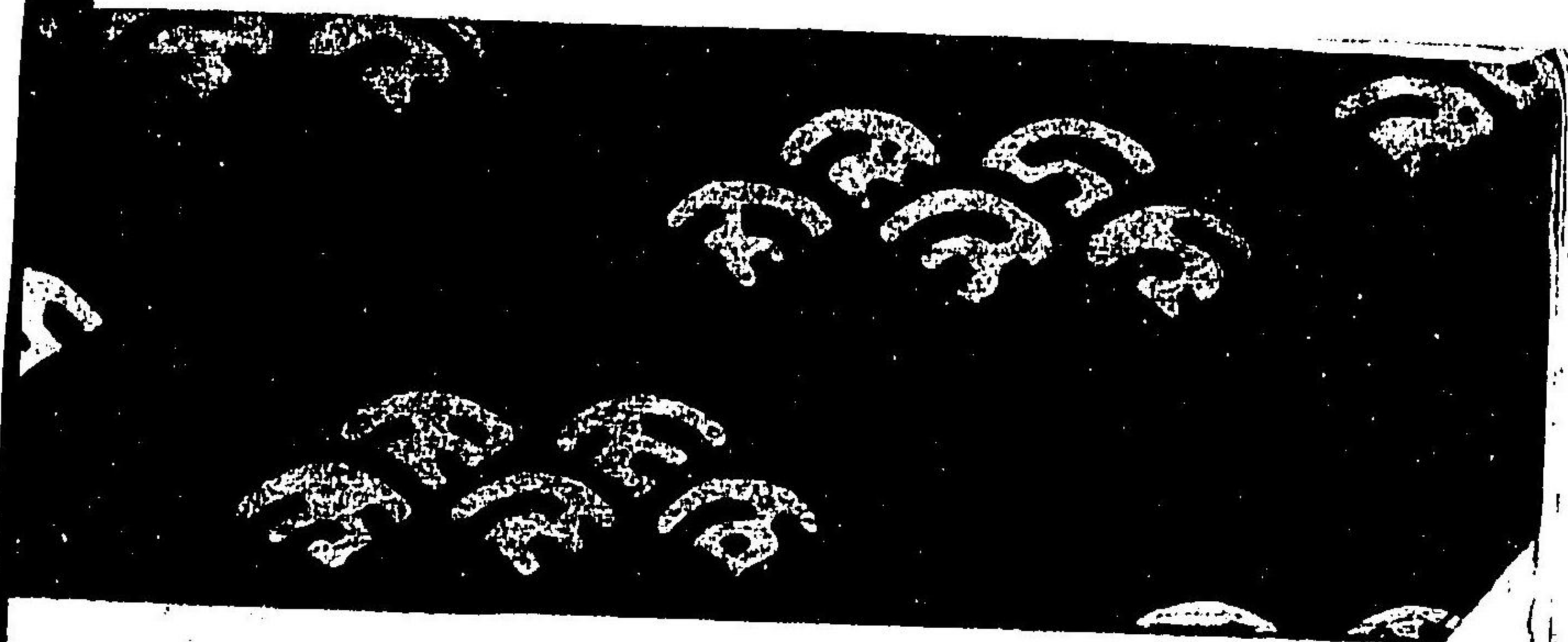
大阪嶋之内八幡筋西横堀北入

鳴之内同盟館

三宅英吉

五圓貯金口座  
天曆七七一番





嶋之内同盟館  
發行